



足元をよく見よう

古墳を飾るもの

今では草木に覆われている古墳ですが、はじめから生えていたわけではありません。では、造られた当時の古墳の表面は、どうなっていたのでしょうか。ただ土が盛り上げていただけだったのでしょうか。「いやそんなことはない、有力者の墓なんだから、きつと何かで飾られていたに違いない」。そう思う人はいませんか。

実際、古墳の表面はいろいろなもので飾られていたことがわかっています。「葺石」と言われる、こぶし大からひと抱えもある石によって墳丘の表面を覆いつくした例や、粘土で作ったさまざまな形をした焼物「埴輪」を並べたもの、また最近の発掘調査では、木製の埴輪が見つかっている古墳もあります。

葺石で覆われ、遠くから見ると白く輝いて見える古墳。人物、馬、家などの埴輪が立てら

古墳の実大模型(松江市古曾志町・古墳の丘古曾志公園)



周布古墳の葺石

れた古墳。とてもにぎやかな様子が浮かんできませんか。「これらの遺物は、その周辺を歩くことにより見つかるともいれませんが、コシは足元をよく見て歩くことです。」



コラム

埴輪を最初に作ったのは古代出雲人?

『日本書紀』といふ日本でもっとも古い書物の中に、埴輪の起源について述べた話が出てきます。それによると、古墳を造り始めたころは主人の死に際して仕えていた人間もいっしょに古墳に埋めていたが、あまりにもかわいそうなので、出雲から野見宿弥という人物を呼んで人間の形をした土の人形を作らせて、代わりに古墳のまわりに立て始めたといわれています。しかし、これを裏付ける考古学的資料は見つかっていません。埴輪自体の発生も、現在の岡山県地域で弥生時代に使われた、葬式用の土器にルーツが求められています。



古代石見人が最初に葺石を使った?

古墳時代が始まる前の弥生時代中期(およそ二〇〇年前)〜江津市の砂丘や広島県の山間部などに、斜面に石を貼り付けたお墓が現れます。このタイプの墓は出雲を中心に発展し、「四隅突出型埴輪墓」といって、古墳のさきがけのような墓として流行します。この「墓を石で覆う」という発想や技術は、古墳時代にも生かされた可能性が高いと言えます。ただし四隅突出型埴輪墓の埴輪自体は、古墳時代の葺石には見られない芸術的な並べ方がされています。



古墳公園を訪ねる

古墳は埴輪で飾られていたり、石によって覆われていることがあります。どのように飾られていたのかを実感するために、まずは復元された古墳を見に行くことにしましょう。

葺石

古墳が現在まで残っているのは、墳丘が崩れないように、土を盛るときにさまざまな工夫がなされているからです。葺石もその一つで土留めの役割を担っていました。ほかに表面を視覚的に飾る意味も強かったと考えられています。しかし葺石のまったくない古墳も多く、とくに小さな古墳の場合には、ほとんどありません。

埴輪

古墳時代に暮らした人びとの服装や住まいを現代に伝えてくれる、人の形や家の形をした形象埴輪は、古墳に関する遺物の中で、私たちに一番なじみがあるものかもしれません。しかし古墳に並べられているのは、ほとんどが人や家の形をしていない、円筒形埴輪と呼ばれる埴輪です。

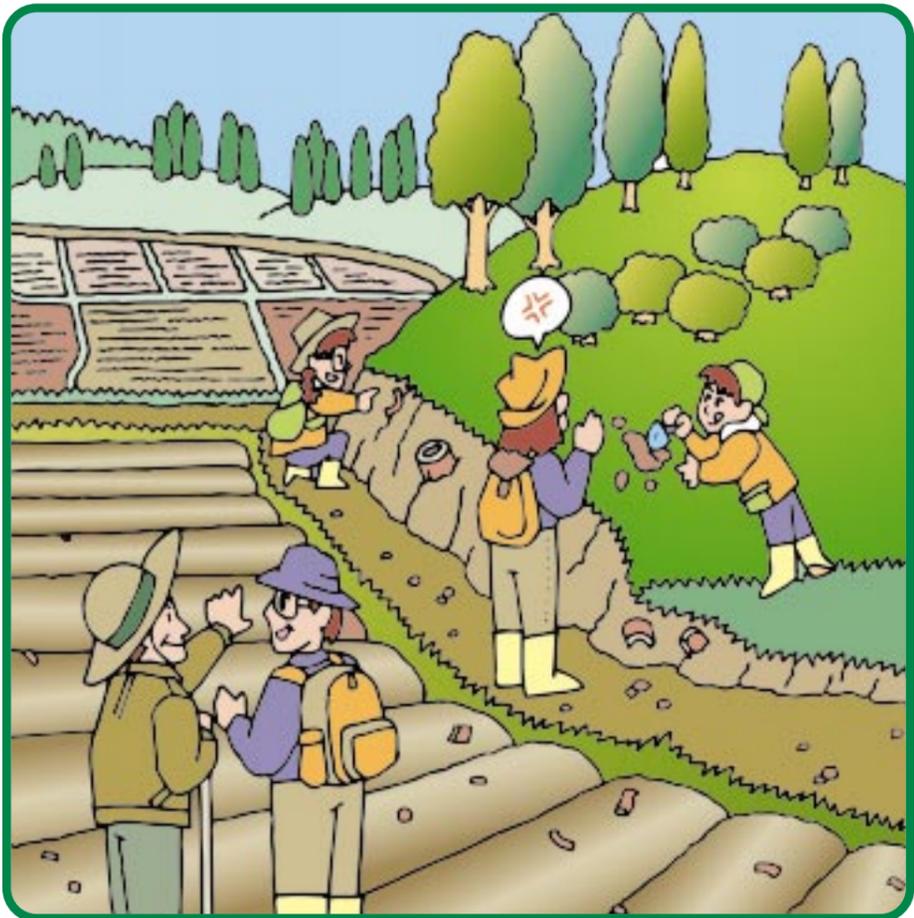
円筒形埴輪は、弥生時代に土器の壺を載せるための筒形の台として生まれ、古墳時代に最初の埴輪として採用されたものです。単純な形をしていますが、古墳の造られた時期を判定する決め手として、とても役に立つ埴輪です。

埴輪を探す

復元された古墳では、石や埴輪はもとの場所に並べられていますが、実際の古墳の場合はどうでしょうか。墳丘の大きな古墳に行くと、その裾に転落した埴輪や葺石が見つかる場合があります。葺石はもとの位置に残っている場合もありますので、墳丘の斜面に落ちていた木の下から見つかるかもしれません。



埴輪発見!(松江市大草町・岩船古墳)



埴輪の破片を見つける

古墳のまわりを探したとき、いちばん多く見つかる埴輪の破片は、円筒形埴輪です。一見ふつふつの土器のようですが、二センチ前後と厚く、幅一センチほどの四角い帯が貼りついている部分があれば、ほぼ円筒形埴輪の破片に間違いありません。



円筒形埴輪の破片

復元された埴輪たち

写真に見える家や馬、人物のほか、戦いで使う刀や盾などの武器、ニリトリヤイノシシなどの動物、船などがあります。



平所遺跡(松江市)出土品